岩見沢東高等学校　男子硬式テニス部通信　２０１２．９．１９．

Ganto Tennis　第１８号

文責：佐々木雄介

9/16 練習試合　対・旭川実業（旭川支部第1位）　新十津川ピンネコート

団体戦　１－４	
Ｓ１水上０●６　Ｄ１門田・小川１●６　Ｓ２古畑３●６	
Ｄ２今村・堤１●６　Ｓ３高橋６○４	
個人戦　１－８	
今村・堤２●６　今村・堤２●６　古畑・水上０●６　古畑・高橋１●６	
門田・小川０●６　古畑●１－６　水上●３－６　門田○６－２　小川１●６	

SOPHISTICATION　洗練

試合前。“ふぁいーとふぁいとーー、ふぁいーとふぁいとーー”これまで聞いたことのないパターンの声出しで練習が続けられる隣のコートで黙々とラケットを振る。罰当番でもさせられてるみたいだな。“ふぁいーとふぁいとーー”が止んで実業のメンバーはボールを拾い始める。“ナイッショー、ナイッショー”あっ、声、出してたのか。やがて再び“ふぁいーとふぁいとーー”が始まり、岩東の“ナイッショー”は儚(はかな)くかき消されてしまう。

この日の戦績は２勝１２敗。0.143。Fighters の４番だって、もうちょっと打つ。これが空知と旭川の差である。だって支部の１位同士の試合なんだから。ボコボコにされたという実感はそれほどなかったのかもしれないが、あんなにボコボコにされたくせに、それをちゃんと実感できなかったことこそ“空知 standard”の限界を物語ってる。

空知で「ボコボコにされる」とは、“腕力”でねじ伏せられ、打ち負かされることを意味する。そして、空知のトップレベルの数人は、漏れなく、ジャイアンみたいに“腕力”でお前達をねじ伏せにくるのだ。のび太はのび太で、ジャイアンに“腕力”で立ち向かおうとするもんだから、当然、手も足も出ない。個人戦ではドラえもんも来てくれない。

一方、旭川実業のテニス。スピードやパワーならお前達とそんなに違いがない。一番違うのは placement(プレースメント)。正確にコントロールされるボールは、ことごとく岩東のミスを誘い、エースはほとんどないのに、点数だけは着実に積み重ねられる。お前達はミスで自滅したつもりになっているけれど、あれが今の岩東の精一杯である。集中が足りなかったのでもなければ、迷いがあったわけでもない。強(し)いて言えば、テニスが下手だった。

今の空知に、ああいうテニスはない。“腕力”の強いジャイアン達と、ジャイアン達にまるっきり頭の上がらない、たくさんののび太達とスネ夫達がいるだけだ。そして、その“腕力”を根拠に、ジャイアンは「のび太になんか絶対に負けるはずがない」と思い込んでいる。“腕力”で劣るのび太は「ジャイアンには絶対に勝てっこない」と決めてかかっている。そして、事実、（よほどのことでもない限り）ジャイアンはのび太に負けることがない。これぞ“空知 standard”のテニスである。

もう一コ上の次元の standard でテニスを考えられる選手は、“腕力”に加えて、“腕力”ではない別の大切な何か（placement や imagination や concentration や determination や・・・・・）が試合の勝敗を左右することを知っている。だから、のび太がジャイアンを倒す方法ぐらいいっぱいあることを疑いもしない。それを sophistication と言う。